九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

Changes in maternal consciousness after childbirth and related paternal and family support

宮中, 文子

https://doi.org/10.15017/458567

出版情報：九州芸術工科大学, 2003, 博士（芸術工学）, 論文博士
バージョン：
権利関係：

第３章　「母親への発達」を視点とした本研究の課題

母性に関する学説や論文は，上述したように社会の母性観に反映すると同時に，両者は互いに影響し合ってきたと考えられる．今日では，女性はその子どもとの関わりで親へと発達するものであるという考え方が支持されるようになってきた．すなわち，母親としての行動や意識は，人間行動の生まれつき遺伝によって規定されている本能的要素と，生まれてのち経験によって獲得する学習的要素のうちで，後者の占める割合が多いといえる．出産後の女性の身体は，母乳が分泌するなどの生理的変化があり，これは親の行動を獲得するために備わった自然の身体的環境で本能的な要素ではある．しかし，心理社会的側面からみると，環境の影響を受けながら学習により獲得することが大きいといえる．本能的要素だけからなる人間行動はない（佐藤,1988）．しかしながら，今日においても，社会一般の母性観はいまだに，女性に固有のものとし，女性であれば誰もが上手に子育てできるとするような概念が混在している．すなわち，顕かに「母親の愛情こそが子どもにとって最善」とする理念を主張するものから，両親による子育てが重要としながらも意識の底流に潜むものまで，その存在は複雑を呈している．

出産とその後の子育て期は，女性が子どもとの高密度な関わりを通じて母親へと発達する過程である．また，「母親への発達」は，妊娠中の胎児との関わりから始まり，出産後の子育てによりいっそう発達すると考えている．子育ては母親のみならず，父親においても，子どもの誕生という満足感と危機感の両方が重なった親への発達課題である．そのような過程にある女性には，子育ては時として心理的危機（crisis）に陥りやすいストレスフルな出来事となる．現在，出産後の親への成長過程において，女性は必ずしも全てが健やかな発達を遂げているとはいえない状況である．

本論文では，女性が出産後，子育てにおいて母親へと経時的に成長していく過程を，心理社会的な側面から観ることとする．その「母親への発達」の過程において，乳児への愛情を基本とした「母親意識」や親役割などの関係性が経時的に形成し発展していくものと考える．その「母親意識」や親役割などの関係性の形成とは，子どもとの関わりで発達する「親性」であると考えられる（大日向,1988

；柏木,1993；汐見,1997)．従って，ここでは従来この種の研究に用いられてきた「母性（Matenity, Maternalhood, Maternal-indentity)」という用語を使用しないこととし，「親性(parenthood)」という概念に立脚し，出産後の育児期の女性であることの「母親」という言葉そのものを使用した．そして，「母親意識」とは，母親の「子どもに対して抱く愛着を伴った特別の気持ちや子育てにおいて生じる親の気持ち」と定義した．それは健康な子育て行動を喚起し維持することの背景にあるものと考えている．また，その親の意識は母親のみならず，父親においても子どもとの関わりで発達するものと考えられる．ただ，父親における親意識に関する研究報告はまだ少なく，母親と全く同じものであると言い切ることは避けたい．また，出産を前提としない母親の親意識については，まだ未検討な課題であるので，この親意識については本論には含めない．

母親を取り巻く環境のうち，父親および家族といった人間環境について検討することは人間工学的な課題でもある．そこで，出産後の女性の「母親意識」を経時的に解析し，その変化の過程と，父親および家族がどのように影響するのかについて検討することとした．そして，健やかな「母親への発達」を促すには，家庭や地域においてどのような支援が必要か，また，「母親への発達」が健やかでない母親に対する支援も含めて考えることを課題とした．